

藤原宮外周帯の調査

—第191次

はじめに 本調査は農業用水路改修にともなうものである。調査地は藤原宮南面外濠と六条大路の間にある外周帯にあたり、従来の調査成果から、藤原宮南面外濠の一部や西一坊坊間路の先行条坊が検出される可能性が見込まれた。調査区は、改修する水路に沿って設定し、全長137m、調査面積は635.7㎡である。調査は2017年1月10日に開始し、2月2日に終了した。正式な報告は『紀要 2018』でおこない、ここでは概要を報告する。

調査成果 調査区は水路による削平が著しく、古代の遺構面が残存しない部分も多い。古代の遺構としては、調査区西部で東西溝を2条検出した。2つの溝は重複し、下層の溝は、北肩が調査区外にあるものの、幅1m程度と推定できる。深さ30cm。蛇行しており流路と考えられる。埋土から、藤原宮造営期の土器や、宮所用瓦が多く出土した。上層の溝は南肩を検出し、幅1.2m以上、検出した深さ20cm。溝は東に向かって北に振れ、調査区西端より23m東で調査区外となる。上層の溝は、調査区から約60m西に位置する第29-6次調査区において検出し

た、藤原宮南面大垣外濠SD501と位置が合致する（『藤原概報 11』）。したがって、外濠もしくは外濠埋立て後の落込み等の可能性もある。

なお、調査区東部は、西一坊坊間路の先行条坊推定位置にあたるが、水路の削平により、古代の遺構面は残存していなかった。しかし、西一坊坊間路東側溝推定位置にあたる調査区南壁土層で溝の可能性のある落込みを確認した。ただし、反対の北壁土層では埋設管の掘方により古代の土層は失われており、条坊側溝と断定するには至らなかった。また西一坊坊間路西側溝は水路によって平面、断面ともに削平されていた。

宮造営前の遺構としては、調査区東部で古墳時代の土坑を検出した。径約40cm、深さ約5cm。埋土から土師器の吉備型甕が出土した。そのほか、自然流路を4条確認した。自然流路は3条が北に向かって西に斜行しており、旧地形に沿ったものと思われる。

今回の調査では、水路の削平のため遺構の残存状態は良好ではなかったが、藤原宮南辺の様相の一端を知ることができた。また、古墳時代以前に関しても、宮造営前の当該地の土地利用状況や旧地形の復元を考える上で参考になる成果を得られたといえよう。 (石田由紀子)



図138 第191次調査区東部全景（北西から）



図139 第191次調査区中央部から西部全景（西から）